

広島県立美術館

研究紀要

第10号

東京国立博物館蔵「厳島・和歌浦図」—右隻・和歌浦図の諸問題 ……	知念 理	1
アレクサンダー・コールダーのフレーム作品について〔補遺〕 ……	石川 哲子	18 (49)
トルクメンのシルバー・ジュエリーに見られる銘文について —広島県立美術館所蔵品を中心に— ……	福田 浩子	48 (19)
当館所蔵鬚光作品の엑스線撮影について ……	角田 新	58 (9)
エル・リシッキー 《第一ケストナー版画集 プロウン》における重力の問題について ……	松田 弘	66 (1)

2007



BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.10

- On the Problem of Gravity in *The First Kestner Portfolio PROUN* by El Lissitzky (1) 66
Hiroshi MATSUDA
- Taking X Rays of Works by Ai-Mitsu in Our Museum's Collection (9) 58
Arata KAKUDA
- Inscriptions in Old Turkmen Jewelry : Mainly from the Collection of Hiroshima Prefectural Art Museum (19) 48
Hiroko FUKUDA SIDDIQI
- Frame Works by Alexander Calder [Addendum] (49) 18
Tetsuko ISHIKAWA
- View of Itsukushima and Wakanoura (a Pair of 6-Fold Screens) in Tokyo National Museum Collection, Problems on the Right Screen Depicting Wakanoura 1
Satoru CHINEN

2007

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN



口絵3 【作品20】 花嫁のための頭飾り



口絵4 【作品20】(内側・部分) 制作者・工房名、年、金と銀の重量に関する鍍金銘文

トルクメンのシルバー・ジュエリーに見られる銘文について

—広島県立美術館所蔵品を中心に—

福田 浩子

I はじめに

昭和43年に開館した広島県立美術館は平成8年10月にリニューアルするのを契機として、3つの重点方針、つまり「広島県ゆかりの美術」、「1920-30年代の美術」、「日本とアジアの工芸」を定め、精力的な作品収集を行った。中央アジアの工芸では、まず、トルクメンとウズベクの民族衣装コレクション、中央アジアから南アジアの一部を含む刺繍袋コレクションが入り、8-14世紀の金工コレクションが加わり、さらに中央アジアのトルクメン人が使用したシルバー・ジュエリー750件という一大コレクションを収蔵したのは、重点収集晩期の平成8年であった。

これは旧蔵者が生涯をかけて蒐集したコレクションで、トルクメン人（族）の中に数多くある支族の独自様式をかなり網羅しており、頭飾りから背飾りにいたるまで多種多様な装身具を見られると同時に、18世紀から20世紀中期までの幅広い年代を含んでいると考えられ、世界的に注目されるべき作品の質と数量を誇っている。実際のところ、750件のうちには、12個の指輪を1件と数えているものもあるので、個数で数えればさらに多い。

当館蔵以外に世界的に大規模なコレクションはロシア、ドイツなど数箇所あり、国内ではポーラ文化研究所コレクション⁽¹⁾もある。また、美術館・博物館以外にも個人コレクターによる比較的大規模なコレクションも存在している。

作品受入当初は、作品やその背景に対する理解がなかったため、受入後に調査研究を遅々とした歩みで行ってきた。作品名などについては筆者の調査などに基づいて、その時々修正を加えてきたが、制作年代・民族（支族）様式については収蔵時から現在に至るまで、ドイツのイスラム美術研究者ヨハネス・カルター氏の見解に沿ってキャプション説明などを行ってきた。

平成9年、筆者は財団法人ポーラ美術振興財団からの研究助成を受け、旧ソ連領中央アジア5カ国のうちカザフスタン、キルギスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタンの現地調査を行うことができた。平成11（1999）年に当館で開催した特別展「トルクメン・ジュエリー展」⁽²⁾には、ロシア国立モスクワ東洋美術館学芸員のエカテリーナ・エルマコワ氏らも来館、意見交換をする機会に恵まれ、ドイツ側の見解とは異なる部分もあり、調査研究の歴史的背景と世界観の相違を感じたこともあった。

作品調査を通じて、様式や使用法は比較的身近に捉えられるようになったものの、実際の制作地と制

作年代については、依然として曖昧模糊としている。これを解きほぐすひとつの指標として、作品に刻まれた銘文を活用できないかというのが近年の課題であった。

本稿では、現段階のまとめとして今後の研究の参考とするため、館蔵品を中心として、年代や制作者・工房特定のための基本資料となる数少ない銘文、文字のある作例を取りあげて紹介しておきたい。そして、制作技法や素材、文様とその意味、様式などについては別稿としたい。

Ⅱ 銘文の種類

トルクメンのジュエリーは、着用場所や用途、支族^③による様式などによってヴァリエーションの幅が広い。現在のところ、銘文の見られるジュエリーは背飾り（アシク）がもっとも多く、次いで、護符入れ（トゥマル、ボズベント）^④、胸飾り（ゴンジュク）、腕飾り（ビレジク）などが多い。

銘文について言及する前に、トルクメンのジュエリーの種類について簡単に記しておこう。一般的に、ジュエリーは主に女性が身につけ、結婚を境として種類や分量が増加する傾向がある。ジュエリーは頭部から腰部あたりの上半身につけ、下半身にはつけない。ズボン状のバラクに丈長ワンピースのコイネク、その上にギナーチ（スカーフ）、チルピといった羽織りもの、被りものを重ねるといった伝統的衣装の構成のためか、乗馬の習慣のためかもしれないが、その理由ははっきりとはしない。子ども用のものは、主に邪視を防ぐ護符としての意味合いが強い。男性は指輪が主で、大切な乗り物である馬を豪華に飾る馬具、鞭が見られる。

とりわけ背飾り（アシク）^⑤は、トルクメン独特の装身具といえるだろう。アシクは邪視を避けるために背中に下げる。あるいは、掌ほどの小さなアシクは長く垂らした三つ編みの髪に下げるといふ。また、3点セットの小さなアシクはそれぞれの間に銀管をはさんで紐を通して着用することもある。2つのアシクが一体化したゴシャ・アシクという形態もある。世界各地の慣習と同じように、中央アジアでも「邪視・邪眼・evil eye」が災いをもたらすものとして捉えられており、さまざまな邪視除けの機能が必要とされた。アシクは、護符としての機能が優先されるのだろうか、他人に見せるためのものではないので、つまり、スカーフや外衣に隠れてしまうことも多く、着用例の正確な記録は少ないようだ。筆者もアシクの着用例を実見したことはまだない。なお、成人女性が背中に着ける護符には、アシク、ゴシャ・アシクの他、数多くのパーツが鎖で繋がったサチュモンジュク^⑥、髪に沿わせて着けるサチュバグやサチュリクがある。成人男性や子ども用の背飾りもある。

護符入れ（トゥマル）もまた独特の形状である。三角の下に円筒形、その下に下げ飾りや鈴がつく。円筒部分は左右どちらかまたは両端が外れるようになっていて、コーランの一節を記した護符やその他の護符を入れるようになっていふ。魔を祓うという鈴の下げ飾りが筒の下についているものが多い。小

型のトゥマルはトゥマルチャと呼ばれる。

護符入れ（ボズベント）は護符を納める容器だけでできている。トゥマルの円筒部分だけのものやコンパクトのように少し高さのある円盤形などのものがボズベントと呼ばれる。円盤形でも容器でないものは別の名で呼ばれる。

胸飾りは種類も名称も多様である。例えば、ゴンジュクは45度傾斜させた正方形の下2辺に下げ飾りがつく。ゲルヤカの「ゲル」は花の意味だが、その名のとおり大輪の花のような形で、裏側に衣服に留めるためのボタン状突起がつけられたものもある。

腕飾り（ビレジク）は通常左右一対で、大ぶりのものが多く、幾つかの段が連なった形になっている。銀板だけで作られているものもあるが、厚みの内側が中空になっていてオガクズや泥のような詰めものが入っている場合もあるので、概して見た目よりも軽く、一対で200グラムから500グラム程度の重量である。それでも、日本人の感覚ではかなりのボリュームだろう。大型ビレジクでは6段くらい（20センチ弱）で一対1キロ程にもなる。ただ見せるためだけに作られたらう50センチ程のビレジクも見かけたことがある。

なお、今回紹介する作品に見られる種類以外にも、種類の豊富な頭飾り、胸飾り、指輪、手飾り、アシクとはまた異なる背飾りなどがある。鼻輪はトルクメンの様式・技法とは異質であるが、インド文化の影響と考えられる。

1 作者・工房銘のあるジュエリー

作者あるいは工房銘としては、複数の作例のあるムッター・ターンデュルディとクルバン・メングリの他、それぞれ1点ずつの作例がある。クルバン・メングりはイランに存在した工房であるとされている⁷⁾が、その他の作者・工房については現在のところ明らかではない。

では、制作者・工房名のある作例を年記順に紹介しよう。

(1) 【作品1】 ホージャ・ナザール 1221



図1 作品1



図2 作品1(表・部分)

銘文は

「アマル・オースタ」「ホージャ・ナザール」(ホージャ・ナザール師作)

「1221サナ」(1221年 A.D.1806-07)⁽⁸⁾

文字の輪郭を刻み、その内側を鍍金する。アマルは作、オースタは師(親方、マスター)、サナは年の意である。太陰暦のヒジュラ暦は西暦よりも1年の日数が短いため、西暦に換算すると2年にまたがることが多い。ヒジュラ暦1221年は、当館所蔵の内、最も古い年記であり、かつ管見の限りでも最古である。A.D.(Anno Domini)は該当する西暦の年。19世紀初頭の貴重な基準作といえるだろう。

(2) 【作品2】 アンナ・スーフィ 1312

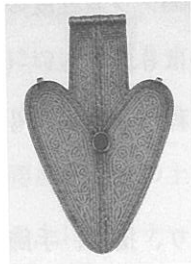


図3 作品2

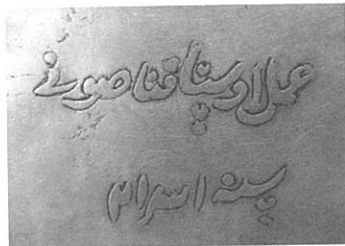


図4 作品2(裏・部分)

「アマル・オースタ・アンナ・スーフィ」(アンナ・スーフィ師作)

「ベサナ1312」(1312の年 A.D.1894-05)⁽⁹⁾

刻線の内側を鍍金する。通常、文字は右から左へ、数字は左から右へと書かれるが、この作品では数字も右から左へ書かれている。文字に誤綴がある。

(3) 【作品3】 オースタ・ムハンマド・ゼリガル 1315



図5 作品3



図6 作品3(柄・部分)

「アマル・オースタ・ムハンマド・ゼリガル」(銀細工師ムハンマドによる作)

「1315サナ」(1315年 A.D.1897-08)⁽¹⁰⁾

柄に線刻による文字がある。ゼリガルは金銀細工師の意味。トルクメン語で鞭をガムチと呼ぶ。

(4) ムッラー・ターンドウルディ 5点 1321-1326 【作品4-8】

ムッラー・ターンドウルディの銘が入った作品は、当館コレクションに5点含まれている。

(i) 【作品4】 ムッラー・ターンドウルディ 1321

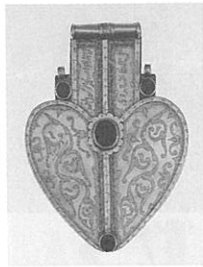


図7 作品4



図8 作品4(表・部分)



図9 作品4(表・部分)

上部左に、

「ラーイラハ イララフ イララーフ ムハンマドゥル ラスラ」(アラーの他に神はなく、ムハンマドは最後の預言者である)

イスラム教への信仰の告白の文章として有名なもの。その右側に

「アマル・ムッラー・ターンドウルディ」(ムッラー・ターンドウルディ作)⁽¹¹⁾

と作者銘が記される。アマルは「作」の意。作品下半分の曲線文の中に、

「1321サナ」(1321年 A.D.1903-04)

が隠れている。銘文は文字の輪郭を彫り、内部を鍍金(年記にはない)し、文字と装飾が一体となって調和したデザイン・技法が使われている。

(ii) 【作品5】 ムッラー・ターンドウルディ 1324

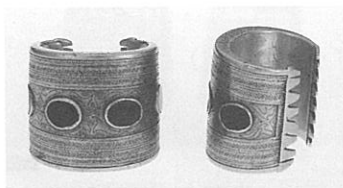


図10 作品5



図11 作品5(部分)

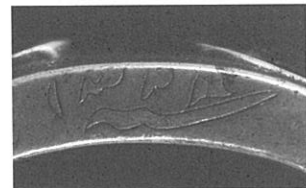


図12 作品5(部分)

一对のビレジクの左右両方に鍍金のある銘文が施されている。トルクメンの腕飾りは一般的に厚みがある。縁部のギザギザは、ひとつひとつが蛇の頭を表し、毒虫などから身を守るとされる。銘の多くは厚みを持たせた木口部分に施されている。

片方に、

「アマル・ムッラー・ターンドウルディ」(ムッラー・ターンドウルディ作)

もう片方に

「1324サナ」(1324年 A.D.1906-07)

と鍍金で記されている。

(iii) 【作品6】 ムッラー・ターンドウルディ 1326

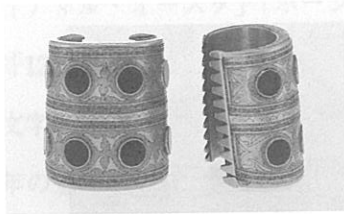


図13 作品6



図14 作品6(部分)



図15 作品6(部分)

銘は片方ずつ

「アマル・ムッラー・ターンドウルディ」(ムッラー・ターンドウルディ作)

「1326サナ」(1326年 A.D.1908-09)

先述のビレジク同様、厚み部分に文字の輪郭をとった刻線、内側を鍍金する。

(iv) 【作品7】 ムッラー・ターンドウルディ 133

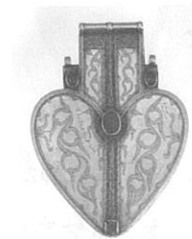


図16 作品7



図17 作品7(表・部分)



図18 作品7(表・部分)

向かって左側に

「アマル・ムッラー・ターンドウルディ」(ムッラー・ターンドウルディ作)

右側に

「133サナ」(133年)⁽¹²⁾

年の最後一桁を書き忘れたか、0を示す小さな点が摩耗など何らかの原因で消失したかもしれない。1330年代だと考えると、A.D.1911-21となる。

先述の3点とは異なり、銘は刻線で鍍金はない。

(v) 【作品8】 ムッラー・ターンドウルディ



図19 作品8



図20 作品8(表・部分)

向かって左上に刻線による銘

「アマル・ムッラー・ターンドウルディ」(ムッラー・ターンドウルディ作)⁽¹³⁾
がある。

(5) 【作品9】 ムッラー・ムハンマド・クリ 1323

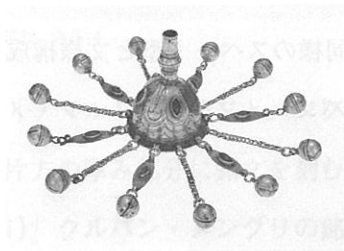


図21 作品9

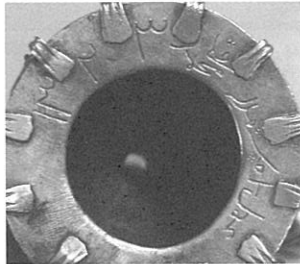


図22 作品9(裏・部分)

「アマル・オースタ・ムッラー・ムハンマド・クリ」(ムッラー・ムハンマド・クリ師作)
「1323」(A.D.1905-06)

グッパは未婚女性が使用するジュエリーで、帽子に縫いつけて被る。ドーム型の底面に刻銘がある。

(6) クルバン・メングリ 5点 1324-1338 【作品10-14】

(i) 【作品10】 クルバン・メングリ 1324

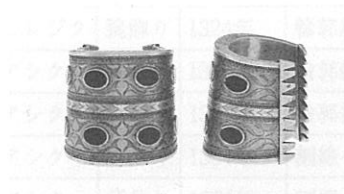


図23 作品10



図24 作品10(部分)



図25 作品10(部分)

「アマル・クルバン・メングリ」(クルバン・メングリ作)

「1324サナ」(1324年 A.D.1906-07)

ビレジクの左右それぞれ厚みのある小口部分に輪郭を線彫りして、内部を鍍金する。

(ii) 【作品11】 クルバン・メングリ 1327



図26 作品11



図27 作品11(表・部分)

銘文は、

「アマル・クルバン・メンゲリ」(クルバン・メンゲリ作)

「1327サナ」(1327年 A.D.1909-10)⁽¹⁴⁾

右側に制作者名、左側に年記の輪郭を彫り、内部を鍍金する。

アシクの上部に二つのスぺード型(木あるいは生命の樹かもしれないが、仮にこのように呼ぶ)が並ぶ特徴的なデザインは他にも数点が知られている⁽¹⁵⁾。また同様のスぺード型と文様構成は、後述する【作品24】ヌーン・メンゲリ銘の1点にも見られ、クルバン・メンゲリとヌーン・メンゲリが同工房あるいは近い関係にあったことを感じさせる。

(iii) 【作品12】 クルバン・メンゲリ 1334



図28 作品12



図29 作品12(表・部分)

「アマル・クルバン・メンゲリ」(クルバン・メンゲリ作)

「1334サナ」(1334年 A.D.1915-16)⁽¹⁶⁾

左上の文様のない部分に銘を刻む。

(iv) 【作品13】 クルバン・メンゲリ

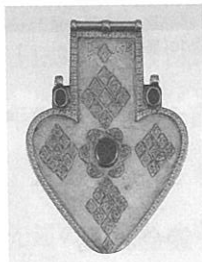


図30 作品13



図31 作品13(表・部分)

「アマル・クルバン・メンゲリ」(クルバン・メンゲリ作)⁽¹⁷⁾

上部の文様のない部分に刻線による銘文がある。海外のコレクションに類例がある⁽¹⁸⁾。

(v) 【作品14】 クルバン・メングリ



図32 作品14



図33 作品14(部分)

「アマル・クルバン・メングリ」(クルバン・メングリ作)

片方の厚み部分に銘文を刻む。年記はない。

(vi) クルバン・メングリの銘文のあるその他の例

ポーラ文化研究所コレクションには、クルバン・メングリ銘のある1点が含まれる。No.69は1334年。なお、No.70にはスペード文様と年記が表面に見られるが、ポーラ文化研究所の村田孝子氏によれば、裏面にもクルバン・メングリの文字はない。

Schletzer1983には、クルバン・メングリ銘が5点含まれる⁽¹⁹⁾。No.180は年記はなく、No.209は1324年、No.211は1334年、No.212は1336年、No.213は1334年。

複数の例が得られるクルバン・メングリの年記を一覧すると次のようになる。

表1 クルバン・メングリ銘のある作品

No	名称	種類	年記	銘文の技法	備考	所蔵・出典	本稿番号
1	ビレジク	腕飾り	1324年	輪郭線+鍍金		当館蔵	【作品10】
2	アシク	背飾り	1324年	輪郭線+鍍金	スペード文様	Schletzer1983 No.209	
3	アシク	背飾り	1327年	輪郭線+鍍金	スペード文様	当館蔵	【作品11】
4	アシク	背飾り	1334年	刻線		当館蔵	【作品12】
5	アシク	背飾り	1334年	刻線	スペード文様	ポーラ No.69	
6	アシク	背飾り	1334年	工房名は刻線、年記は輪郭線+鍍金	スペード文様	Schletzer1983 No.211	
7	アシク	背飾り	1334年	刻線	スペード文様	Schletzer1983 No.213	
8	アシク	背飾り	1336年	おそらく輪郭線+鍍金	スペード文様	Schletzer1983 No.212	
9	アシク	背飾り	なし	刻線	銀板貼付	当館蔵	【作品13】
10	ビレジク	腕飾り	なし	刻線		当館蔵	【作品14】
11	アシク	背飾り	なし	刻線	銀板貼付	Schletzer1983 No.180	

現在確認している限りでは、クルバン・メングリ銘は1324-1338年の範囲で、特に1334年の年記が多い。

(7) 【作品15】 ガイエブ・サリティ 1325

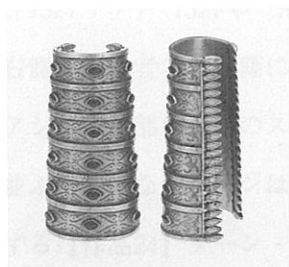


図34 作品15

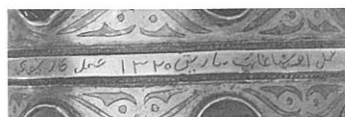


図35 作品15(外側・部分)

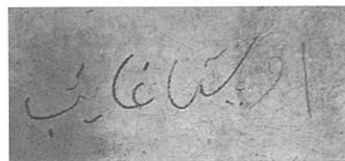


図36 作品15(内側・部分)



図37 作品15(内側・部分)

ターンデュルディやクルバン・メングリ銘のビレジクのような厚みがないビレジクのためか、刻銘は片方の外面と内面に記されている。外側には、はっきりとした線で

「アマル・オースタ・ガイェブ・サリティ」(ガイェブ・サリティ師作)

「1325」(1325年 A.D.1907-08)

内側に細い線で

「オースタ・ガイェブ」

「1325サナ」(1325年 A.D.1907-08)

と刻線による銘がある。

(8) 【作品16】 アウラズ・ドウルディ 1325

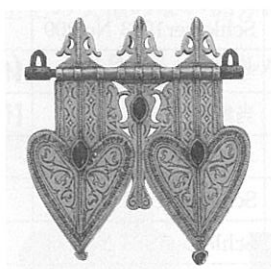


図38 作品16

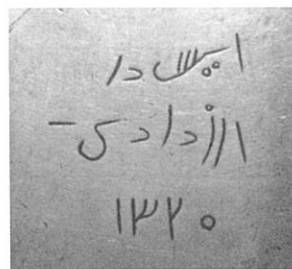


図39 作品16(裏・部分)

裏側に刻線で

「アマル・アウラズ・ドウルディ」(アウラズ・ドウルディ作)

「1325」(1325年 A.D.1907-08)

裏側に2箇所、銀板を補強するための棒がつけられている。ゴシャ・アシクにはこのような補強がしばしば見られる。

(9) 【作品17】 ムハンマド・ハター 1325



図40 作品17



図41 作品17(裏・部分)

「アマル・オースタ・ムハンマド・ハター」(ムハンマド・ハター師作)

「1325サナ」(1325年 A.D.1907-08)⁽²⁰⁾

魚型と鈴の下げ飾りが交互につけられたゴンジュク。裏側に弱い刻線で記される。

(10) 【作品18】 タージ・オスパニ 1327 1343 133



図42 作品18



図43 作品18(表・部分)

「タージ・オスパニ」

「1343」、「1327」、「133」⁽²¹⁾

と3つの数字がある。

銘文はすべて、文様のない部分に刻線で表す。タージは冠の意。数字が年記だとすると、1327年はA.D.1909-10、1343年はA.D.1924-25となる。

現在は胸飾りとしているが、頭から額へ下げる装身具かもしれない。

(11) 【作品19】 イスラム・クルドウルディ 1335



図44 作品19



図45 作品19(裏側)

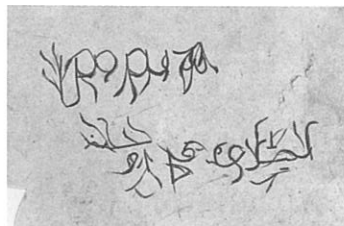


図46 作品19(裏・部分)

「イスラム・クル・ドウルデイ」

「1335」(A.D.1916-17)

小型のアシクの裏側に、誤綴のある文字を刻んでいる。

(12) 【作品20】 バイラム・ムハンマド 1342

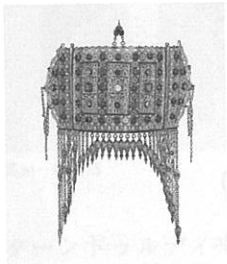


図47 作品20



図48 作品20(内側・左部分)



図49 作品20(内側・中央部分)



図50 作品20(内側・右部分)

中央に

「アマル・バイラム・ムハンマド」(バイラム・ムハンマド作)

「ヤーハイ」

「ヤカイユム」

「1342サナ」(1342年 A.D.1923-24)

左側に

「銀の重量 135ミスカール」

右側に

「金の重量 2ミスカールと 4」

とある。整った書体の文字の輪郭を線彫りし、「1342サナ」のみ鍍金する。詳しくは後述する。

(13) 【作品21】 オラズ・ケリヒ 1343

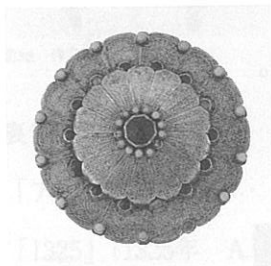


図51 作品21



図52 作品21(裏・部分)

「アマル・オラズ・ケリヒ」(オラズ・ケリヒ作)

「1343サナ」(1343年 A.D.1924-25)

「オン・アルティ」(16)⁽²²⁾

裏側にボタンの役割を果たす突起がついたグルヤカである。銘は裏側にあり、飾り枠の中に刻まれている。オン・アルティはトルクメン語(チュルク諸語)で16のことだが、それが示す意味はわからない。

(14) 【作品22】 ムッラー・ハイダル 1346



図53 作品22



図54 作品22(表・部分)



図55 作品22(表・部分)

「アマル・ムッラー・ハイダル」(ムッラー・ハイダル作)

「1346」(1346 A.D.1927-28)

アシク全面に広がった文様の間に散らすように文字を配置している。刻線の内側を鍍金する。

(15) 【作品23】 マウラム・ベルディ

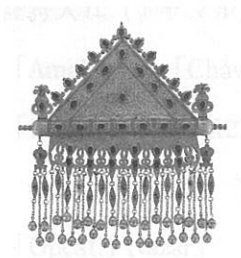


図56 作品23



図57 作品23(表・部分)

「アマル・マウラム・ベルディ(マウラム・ベルディ作)」。⁽²³⁾

トゥマルの三角の頂点部分に文字の輪郭を取り、内部を鍍金する。

(16) 【作品24】 ヌーン・メングリ



図58 作品24



図59 作品24(表・部分)

「アマル・ヌーン・メングリ」(ヌーン・メングリ作)⁽²⁴⁾

文字の輪郭を彫った中を鍍金する。

上部のスペード型文様や文様構成などから、クルバン・メングリとの関連が伺えるが、明らかではない。

(17) 【作品25】 クルバン・ゲルディ・ファシ



図60 作品25

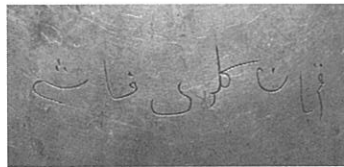


図61 作品25(裏・部分)

「クルバン・ゲルディ・ファシ」⁽²⁵⁾

魚型と鈴の下げ飾りがつけられたゴンジュクの裏側に鑿の動きが感じられる刻線で表す。

(18) 【作品26】 アワズ・ムラド・ベルカリ



図62 作品26



図63 作品26(裏・部分)

「オースタ・アワズ・ムラド・ベルカリ・アマル」(アワズ・ムラド・ベルカリ師作)⁽²⁶⁾

裏側の内側に誤綴のある銘文を線彫りする。

(19) 【作品27】 ムッラー・ムラート

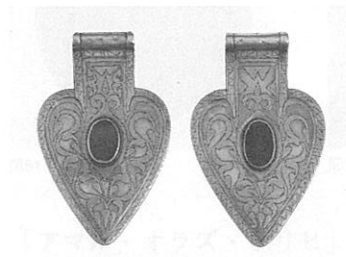


図64 作品27

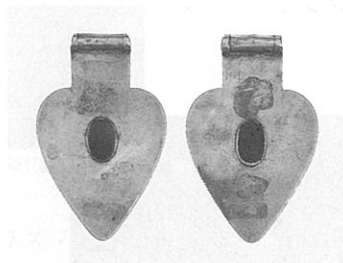


図65 作品27(裏側)

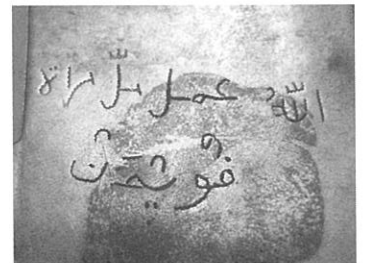


図66 作品27(裏・部分)

「アマル・ムッラー・ムラート」(ムッラー・ムラート作)

一对の小型アシクの片方の裏側に刻線で表す。2点共、カーネリアンが貫通しているため、透過光によって石の色味が美しく見える。

(20) 【作品28】 ムハンマド・ヤル

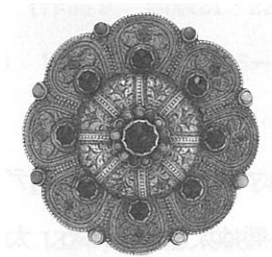


図67 作品28



図68 作品28(裏・部分)

「アマル・ムハンマド・ヤル」(ムハンマド・ヤル作)

作品21と同形態のグルヤカ。銘文と鳥の線刻。

他コレクションの中には、当館蔵品に見られない銘も存在している。今後、これらや類似の銘が現れた時の参考として紹介しておきたい。

(21) Amal Osta Chawje Niaz 1272 1277

護符入れ(トゥマル)の裏側に

「Amal Osta」「Chawje Niaz」(Chawje Niaz師作)

「1272」または「1277」⁽²⁷⁾。

(22) Opca (?) Nazar 1324

「Opca(?) Nazar」

「1324」⁽²⁸⁾

腕飾り(ビレジク)の木口部分に刻銘。

(23) Djozar Sar Mast・Abdi Bai 1332

「Djozar Sar Mast」

「1322」

「Abdi Bai」⁽²⁹⁾。

ガムチ(鞭)の持ち手に刻銘。著者のSchletzer氏は「Abdi Bai」は注文主あるいはかつての所有者名と考えている。

(24) カリ・ウスタ・バハドール・ムラド・オールド・コリ 1343

ゴシャ・アシクの表面に刻線で

「1343サナ」(1343年)

裏側に刻線で

「カリ・ウスタ・バハドール・ムラド・オールド・コリ」⁽³⁰⁾

と記す。

2 制作年銘のあるジュエリー

トルクメンのジュエリーに刻まれた制作年のほとんどは、預言者ムハンマドがメッカからメディナへ聖遷(移住 ヒジュラ)した年を基準としたヒジュラ暦である。ヒジュラ暦は太陰暦のため、太陽暦のグレゴリオ暦(西暦)とはズレが生じる。しかし、ペルシアやアフガニスタンで使われてきたヒジュラ太陽暦(イラン暦・ペルシア暦ともいう)の可能性も残されているので、注意が必要かもしれない。前述の作品との重複もあるが、制作年順に列挙する。

(1) 1221年 (A.D.1806—07)

1221年という年記は、当館コレクション中で最も古いだけでなく、現在把握している範囲でも最古である。

「アマル・オースタ」「ホージャ・ナザール」、「1221サナ」。

【作品1 図版1・2】を参照。

(2) 1271年 (A.D.1854—55)

宝石や貴石に文字を彫刻するのは、古代からの伝統でもあるので、決して珍しくないが、トルクメンのジュエリー中では貴重な年代資料である。

「アッラー」、「ムハンマド」、「アリ」、「ハサン」、「フサイン」、「ファーティマ」、「1271サナ」。

【作品34 図版79・80】を参照。

(3) 1312年 (A.D.1894—95) アンナ・スーフィ

「アマル・オースタ・アンナ・スーフィ」、「ベサナ1312」。

【作品2 図版3・4】を参照。

(4) 1315年 (A.D.1897—98) オースタ・ムハンマド・ゼリガル

「アマル・オースタ・ムハンマド・ゼリガル」、「1315サナ」。

【作品3 図版5・6】を参照。

(5) 1321年 (A.D.1903—04) ムッラー・ターンドゥルディ

「ラーイラハ イララフ イララーフ ムハンマドゥル ラスルラ」、「アマル・ムッラー・ターンドゥルディ」、「1321サナ」。

【作品4 図版7・8・9】を参照。

- (6) 1323年 (A.D.1905-06) ムッラー・ムハンマド・クリ

「アマル・オースタ・ムッラー・ムハンマド・クリ」、[1323]。

【作品9 図版21・22】を参照。

- (7) 1324年 (A.D.1906-07) クルバン・メングリ

「アマル・クルバン・メングリ」、[1324サナ]。

【作品10 図版23・24・25】を参照。

- (8) 1324年 (A.D.1906-07) ムッラー・ターンドウルディ

「アマル・ムッラー・ターンドウルディ」、[1324サナ]。

【作品5 図版10・11・12】を参照。

- (9) 1325年 (A.D.1907-08) ムハンマド・ハター

「アマル・オースタ・ムハンマド・ハター」、[1325サナ]。

【作品17 図版40・41】を参照。

- (10) 1325年 (A.D.1907-08) アウラズ・ドウルディ

「アマル・アウラズ・ドウルディ」、[1325]。

【作品16 図版38・39】を参照。

- (11) 1325年 (A.D.1907-08) ガイエブ・サリティ

「アマル・オースタ・ガイエブ・サリティ」、[1325]。

「オースタ・ガイエブ」、[1325サナ]。

【作品15 図版34・35・36・37】を参照。

- (12) 1326年 (A.D.1908-09) ムッラー・ターンドウルディ

「アマル・ムッラー・ターンドウルディ」、[1326サナ]。

【作品6 図版13・14・15】を参照。

- (13) 1327年 (A.D.1909-10) クルバン・メングリ

「アマル・クルバン・メングリ」、[1327サナ]。

【作品11 図版26・27】を参照。

- (14) 1327年 (A.D.1909-10) または1343年 (A.D.1924-25) か タージ・オスパニ

「タージ・オスパニ」、[1343]、[1327]、[133]。

【作品18 図版42・43】を参照。

(15) 【作品29】 1328年 (A.D.1910-11)



図69 作品29

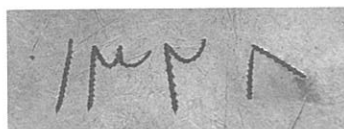


図70 作品29(裏・部分)

「1328」

護符入れの一種、ボズベントの裏側に線刻で記す。

(16) 【作品30】 1328年 (A.D.1910-11)

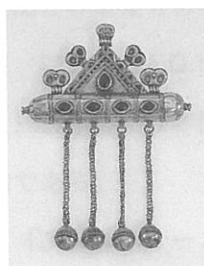


図71 作品30



図72 作品30(裏・部分)

「1328」⁽³¹⁾

トゥマールの三角部分の裏側に山または天幕の形と年を線刻する。

(17) 【作品31】 1330年 (A.D.1911)



図73 作品31



図74 作品31(裏・部分)

「1330」

小型アシクの裏側に線刻。

(18) 1330年代 (A.D.1911-21) か ムッラー・ターンドウルディ

「アマル・ムッラー・ターンドウルディ」、「133サナ」。

【作品7 図版16・17・18】を参照。

(19) 【作品32】 1332年 (A.D.1913-14)



図75 作品32

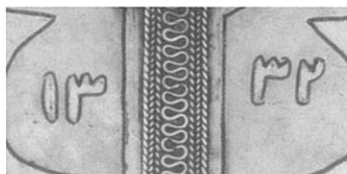


図76 作品32(表・部分)

「1332」⁽³²⁾

アシクの中心から少し下に輪郭を彫り、鍍金する。上部に4つ繰り返した文様は、他のアシクにも見られる。

(20) 1334年 (A.D.1915-16) クルバン・メングリ

「アマル・クルバン・メングリ」、「1334サナ」。

【作品12 図版28・29】を参照。

(21) 1335年 イスラム・クルドウルディ

「イスラム・クルドウルディ」、「1335」。

【作品19 図版44・45・46】を参照。

(22) 1342年 (A.D.1923-24) バイラム・ムハンマド

「アマル・バイラム・ムハンマド」、「ヤーハイ」、「ヤカイユム」、「1342サナ」、「銀の重量 135 ミスカール」、「金の重量 2 ミスカールと 4」⁽³³⁾。

【作品20 口絵3・4、図版47・48・49・50】を参照。

(23) 1343年 (A.D.1924-25) オラズ・ケリヒ

「アマル・オラズ・ケリヒ」、「1343サナ」、「オン・アルティ」。

【作品21 図版51・52】を参照。

(24) 1346年 (A.D.1927-28) ムッラー・ハイダル

「アマル・ムッラー・ハイダル」、「1346」。

【作品22 図版53・54・55】を参照。

(25) 【作品33】 A.D. 1942年



図77 作品33



図78 作品33(裏・部分)

「1942」

「ATA」⁽³⁴⁾

裏側に線刻で記す。ヒジュラ暦でなく、西暦で表した例は当館コレクションでは唯一である。

3 重量銘のあるジュエリー

トルクメン人(族)には多くの支族があり、そのひとつである北ヨムート族(支族)の様式とされる。【作品20】の華やかな頭飾りはカーブした板状のパーツが正面と左右の3面と下げ飾り、装着のための鎖と鈎金具で構成されている(口絵3・4、図47-50)。額の上を飾る銀板は頭飾りのエグメの形式を受け継いでいるのかもしれない。魚型の下げ飾りは、頭飾りの一種イルディルジチュのように両端が長く下がり、中央部は短く、顔を縁取る。透き、ルビー色、黄色、緑色のガラスを散りばめ、刻線と鍍金による装飾が施されている。一般的なトルクメンの装身具に見られるカーネリアンは使用されていない。刻線と鍍金で玉葱型の屋根を持つ建物らしきシルエットは、モスクのドームあるいはロシア文化の影響だろうか。象嵌にはカーネリアンを好むトルクメンの中で、ガラスの多色使いは珍しい。

本作の銘文は中央の銀板の裏側に、3つの部分からなっている。銘文は刻線で均整のとれた書体に輪郭を取り、年記のみ内部を鍍金する。裏側の銘文だけでも華やかな雰囲気を放っている。

銘文は、中央に「アマル・バイラム・ムハンマド(バイラム・ムハンマド作)」、「ヤーハイ」「ヤカイユム」、「1342サナ(1342年 A.D.1923-24)」、左側に「銀の重量 135ミスカール」、右側に「金の重量2ミスカールと4」とある。

ミスカール مِسْقَال は、イスラム文化圏で使用される重さの単位で、1ミスカール=4.464gである⁽³⁵⁾。

銘文から計算すると、

金の重量 2.4ミスカール \div 10.71g

銀の重量 135ミスカール \div 602.64g

となり、合計して613.35グラムとなる。この重量には、色ガラスは含まれていない。なお、この作品

を計量したところ、644グラムであった。

重量をメモのような軽い扱いでなく、わざわざ彫金で銘文にした意味は明らかではない。花婿側からの贈りもののひとつとして、財宝の価値、家の格や豊かさを誇示するために記されたのかもしれない。ジュエリーの価格を金銀の重量で決める商習慣は現代でも行われており、花嫁のための頭飾りの価値を重視するものとして考えていることが伺える。

4 文字を刻んだ石・ガラスを象嵌するジュエリー

西アジア・中央アジアでは、古代から宝石・貴石や金属に文字や絵の彫刻が頻繁に行われてきた⁽³⁶⁾。が、それらの多くは人物などの文様と文字の組み合わせであり、時には印章として作られており、当館コレクションに見られる石・ガラスへの刻銘とは性格を異にしている。

カーネリアン（紅玉髓）やガラスに刻まれた銘文には「アッラー」「ムハンマド」「ハサン」「フサイン」「ファーティマ」「アリー」のように神と預言者、そして預言者の家族親類の人名が多く、また、「友人」「記憶」といった記念的な言葉も見られる。

(1) 【作品34】 預言者の家族名 1271



図79 作品34



図80 作品34(表・部分)

「アッラー」

「ムハンマド」

「アリー」

「ハサン」

「フサイン」

「ファーティマ」

「1271サナ」(1271年 A.D.1854-55)⁽³⁷⁾

このボズベントは、薄い身と蓋がコンパクトのように開く護符入れで、中央に大振りのカーネリアンが象嵌される。彫刻された文字は白く彩色されている。アッラーは神、ムハンマドはイスラム教の創始者で最後の預言者、ムハンマドの従兄弟で第4代カリフとなるアリーはムハンマド

の娘ファーティマと結婚し、ハサン、フサインの2人の息子を授かった。つまり、銘文の登場人物は神と預言者、その子孫ということになる。

預言者ムハンマドとその家族たちの名はイスラム社会で広く使用される名前である。

(2) 【作品35】 ニマトゥラー・ビン・イスマトゥラー



図81 作品35



図82 作品35(表・部分)

このアシクには涙型、珍しい角形、楕円型テーブルカットのカーネリアン6個が象嵌されており、最下部先端のカーネリアンに

「ニマトゥラー・ビン・イスマトゥラー」(イスマトゥラーの息子ニマトゥラー)⁽³⁸⁾と銘文が彫刻されている。

(3) 【作品36】 ヤドガル

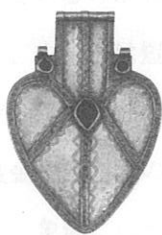


図83 作品36



図84 作品36(表・部分)



図85 作品36(表・部分)

アシクの中央に配置された下側が尖った多角形のガラスに

「ヤドガル」(記憶、思い出、記念の意)と彫られる。

(4) 【作品37】 ムハンマド

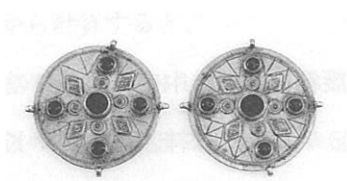


図86 作品37

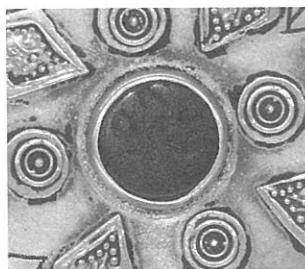


図87 作品37(表・部分)

一対の胸飾りで、線彫と鍍金銀板の貼付、周囲に緑色ガラス4つ、中央にはムハンマドの文字を彫った赤色ガラスを象嵌する⁽³⁹⁾。

当館コレクション中の銘文のある作例は、カーネリアンを使うものもあるものの、比較的ガラスが多い。このような文字のあるガラスはビーズのように流通しているものが使われたのかもしれない。

(5) 【作品38】 アリー

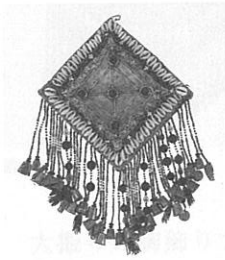


図88 作品38

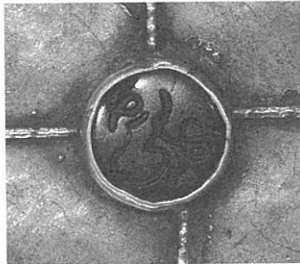


図89 作品38(表・部分)



図90 作品38(下げ飾り・部分)

上部のパネルに子安貝をぐるりと巡らせ、色々のビーズと指貫が下げ飾りになった賑やかなゴンジュク、胸飾りである。裏側は綿プリントがあしらわれている。「アリー」という人名が彫られた5個のガラスが象眼され、下げ飾りにも同様なガラスが使用されている⁽⁴⁰⁾。

(6) 【作品39】 ムハンマド

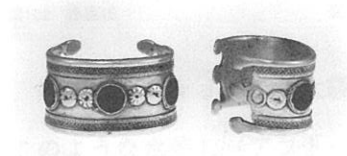


図91 作品



図92 作品39(外側・部分)

鍍金のない1段造りのビレジクで、3つずつ「ムハンマド」と彫られたガラスが象嵌される⁽⁴¹⁾。

(7) 【作品40】 アッラー ハビビ

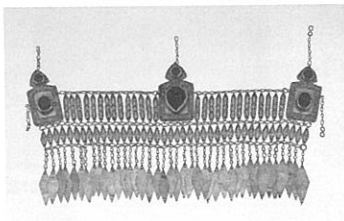


図93 作品40

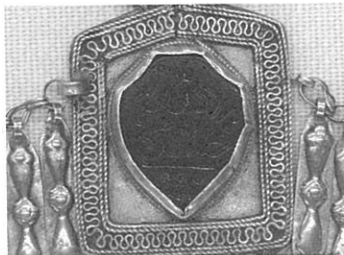


図94 作品40(表・部分)

既婚女性の頭飾り。本作のように菱形の板が同じ長さで下げ飾りになった頭飾りはシンシレと呼ばれる。中央の下側が尖った多角形ガラスに「アッラー」「ハビビ」（友人あるいは愛しい人の意）と彫られている⁽⁴²⁾。

5 その他の銘文・文様のある作品

(1) 【作品41】 護符

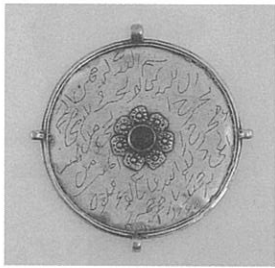


図95 作品41

中央に黒色ガラス、その周りに型押し銀板7枚が花のように配される。表一面に刻まれた文字は誤字が多く、詳細に判読できないが、邪視や問題から守られたいという願いが記されている。

(2) 【作品42】 護符



図96 作品42(表)



図97 作品42(裏)

6点の小さな飾りで1件扱いとなっている内の1点に文字が刻まれたものが含まれている。護符の文言は両面に記される。このような小さなものは大きいジュエリーの一部の可能性もあるが、子どものお守り、魔除けとして背中や肩などにつけることがある。

(3) 【作品43】 護符



図98 作品43

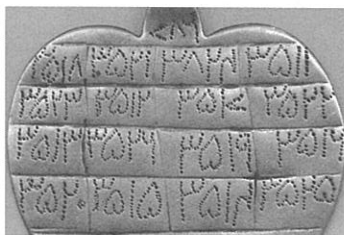


図99 作品43(表・部分)

小さなアシクである。ハート型の中に枠線を刻み、さまざまな数字が刻まれる。上の3文字は「786」で、この数字は「神の名において」という意味になるという（アラビア語では「ビスマッラー」）。残りの4桁×16個の数字も祈りの言葉を表しているのだろう。⁽⁴³⁾

(4) 【作品44】 ジャマリ

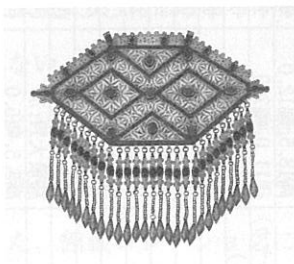


図100 作品44



図101 作品44(裏・部分)

大振りの胸飾りで、裏側に「ジャマリ」⁽⁴⁴⁾と刻まれている。その言葉の意味は人名かもしれないが、現在はわからない。

(5) 【作品45】 水差し

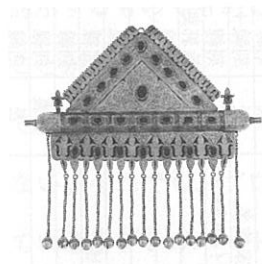


図102 作品45



図103 作品45(裏・部分)

当館コレクションで最大級のトゥマルである。裏側の三角部分に水差しの線刻が2つ見られる。このような水差し（アフターバ）は、現代でも食事前後の手洗いを始めとする生活の中で使われている。金属製だけでなく、素材を変えてプラスチック製のアフターバも作られている。

(6) 【作品46】 鳥



図104 作品46



図105 作品46(裏・部分)

蓋が開く小さな護符入れ、クムシュドガである。裏側に翼を広げた鳥の線刻がある。

表2 銘文のあるトルクメン・ジュエリー (広島県立美術館蔵)

標識	制作者・工房	年記	その他	位置	銘文の技法	作品名(トルクメン語)	寸法	参考カテゴリー氏による様式	所蔵番号
1	ホージャヤ・ナザール	1221年(A.D.1806-07)		表	輪郭線+鍍金	背飾り(アシク)	高26.5	テケ	HC-181
2	アンナ・スフイ	1312年(A.D.1894-05)		裏	輪郭線+鍍金	背飾り(アシク)	高27.5	テケ	HC-185
3	オースタ・ムハンマド・ゼリガル	1315年(A.D.1897-08)		持ち手	刻線	鞆(ガムチ)	柄長32.5, 全長87.0	エルサリ	HC-328
4	ムッラー・ターン・ドウルディ	1321年(A.D.1903-04)		表	輪郭線+鍍金	背飾り(アシク)	高23.0	ヨムート	HC-200
5	ムッラー・ターン・ドウルディ	1324年(A.D.1906-07)		木口	輪郭線+鍍金	腕飾り(ビレジク)	高7.0	ヨムート	HC-258
6	ムッラー・ターン・ドウルディ	1326年(A.D.1908-09)		木口	輪郭線+鍍金	腕飾り(ビレジク)	高8.7	ヨムート	HC-259
7	ムッラー・ターン・ドウルディ	1330年代(A.D.1911-21)か		表	刻線	背飾り(アシク)	高21.0, 幅15.0	ヨムート	HC-578
8	ムッラー・ターン・ドウルディ	なし		裏	刻線	背飾り(アシク)	高23.5, 幅16.0	ヨムート	HC-579
9	ムッラー・ムハンマド・クリ	1323年(A.D.1905-06)		裏	刻線	未婚女性用帽子飾り(グッパ)	高7.5	テケ	HC-297
10	クルバン・メンダリ	1324年(A.D.1906-07)		木口	輪郭線+鍍金	腕飾り(ビレジク)	高7.0	ヨムート	HC-257
11	クルバン・メンダリ	1327年(A.D.1909-10)		表	輪郭線+鍍金	背飾り(アシク)	高23.5	ヨムート	HC-201
12	クルバン・メンダリ	1334年(A.D.1915-16)		表	刻線	背飾り(アシク)	高21.5	ヨムート	HC-577
13	クルバン・メンダリ	なし		表	刻線	背飾り(アシク)	高21.5	ヨムート	HC-193
14	クルバン・メンダリ	なし		木口	刻線	腕飾り(ビレジク)	高5.9	ヨムート	HC-255
15	ガイエブ・サリテイ	1325年(A.D.1907-08)		内外	刻線	腕飾り(ビレジク)	高18.5	テケ	HC-252
16	アウラズ・ドウルディ	1325年(A.D.1907-08)		裏	刻線	背飾り(ゴシヤ・アシク)	高15.0	テケ	HC-219
17	ムハンマド・ハター	1325年(A.D.1907-08)		裏	刻線	胸飾り(ゴンジュク)	高30.0, 幅21.0	サルイク	HC-462
18	タージ・オスバニ	1327年(A.D.1909-10)		表	刻線	胸飾り	高22.5, 幅14.5	サルイク	HC-482
19	イスラム・クルドウルディ	1335年(A.D.1916-17)		裏	刻線	背飾り(アシク)	高12.3, 幅76.0	ヨムート	HC-733
20	バイラム・ムハンマド	1342年(A.D.1923-24)	金と銀の重量	裏	輪郭線+鍍金	花嫁用頭飾り	高14.7(下げ飾り除く)	北ヨムート	HC-030
21	オラズ・ケリヒ	1343年(A.D.1924-25)	飾り枠	裏	刻線	飾りボタン(グルヤカ)	径13.0	ジャフアバイ・ヨムート	HC-434
22	ムッラー・ハイダル	1346年(A.D.1927-28)		表	輪郭線+鍍金	背飾り(アシク)	高24.0	ヨムート	HC-202
23	ヌーン・メンダリ	なし		表	輪郭線+鍍金	護符入れ(トウマル)	幅39.5	テケ	HC-078
24	ヌーン・メンダリ	なし		表	輪郭線+鍍金	背飾り(アシク)	高22.0	ヨムート	HC-199
25	クルバン・ゲルディ・フアシ	なし		裏	刻線	胸飾り(ゴンジュク)	高36.5, 幅27.0	サルイク	HC-463
26	アワズ・ムラド・ベルカリ	なし		裏	刻線	胸飾り	高11.5	テケ	HC-442
27	ムッラー・ムラート	なし		裏	刻線	背飾り(アシク)	高11.0	北ヨムート	HC-229
28	ムハンマド・ヤル	なし	鳥	裏	刻線	飾りボタン(グルヤカ)	径10.0	西ヨムート	HC-169
29	なし	1328年(A.D.1910-11)		裏	刻線	護符入れ(ボズベント)	径7.0	テケ	HC-300
30	なし	1328年(A.D.1910-11)		裏	刻線	護符入れ(トウマル)	高13.0, 幅12.0	エルサリ	HC-507
31	なし	1330年(A.D.1911)		裏	刻線	護符入れ(トウマル)	高9.7, 幅5.8	ヨムート	HC-740
32	なし	1332年(A.D.1913-14)		表	刻線	背飾り(アシク)	高18.5, 幅12.0	サルイク	HC-584
33	なし	(A.D.)1942年		裏	輪郭線+鍍金	胸飾り(アシク)	高11.0, 幅7.0	テケ	HC-436
34	なし	1271年(A.D.1854-55)	神と預言者の家族名	表	刻線+白色	護符入れ(ボズベント)	径6.5	サルイク	HC-340
35	なし	なし	ニマトカラ-ピシ-イスマトカラ-	表	刻線	背飾り(アシク)	高25.0, 幅14.0	サルイク	HC-596
36	なし	なし	ヤドガル	表	輪郭線	背飾り(アシク)	高21.0, 幅14.3	サルイク	HC-729
37	なし	なし	ムハンマド	表	刻線	胸飾り	径7.5	ヨムート	HC-346
38	なし	なし	アリー	表	刻線	胸飾り(ゴンジュク)	高36.0, 幅23.0	エルサリ	HC-452
39	なし	なし	ムハンマド	表	刻線	腕飾り(ビレジク)	高4.5	(トルクメン人)	HC-647
40	なし	なし	アッラー、ハビビ	表	刻線	頭飾り(ボズベント)	高18.5, 幅40.0	(トルクメン人)	HC-385
41	なし	なし	護符	表	刻線	胸飾り(ボズベント)	径7.0	西ヨムート	HC-306
42	なし	なし	護符	表裏	刻線	小型銀製飾り	高最大11.3	(トルクメン人)	HC-766
43	なし	なし	護符	表	刻線	背飾り(アシク)	高5.5, 幅5.0	(トルクメン人)	HC-624
44	なし	なし	ジャマリ	裏	刻線	胸飾り(ゴンジュク, グルサクチャ)	高32.0, 幅35.0	ヨムート	HC-424
45	なし	なし	水差し	裏	刻線	護符入れ(トウマル)	幅39.5	テケ	HC-076
46	なし	なし	鳥	裏	刻線	護符入れ(クムシムドガ)	幅6.0	北ヨムート	HC-113

Ⅲ まとめ

現在、筆者が知り得た銘文のあるトルクメンのジュエリーは以上のとおりである。

制作者と年代特定のための基準作を明らかにしたいという当初の目的で始めたが、世界に例のない重量に関する銘文などの収穫があった。しかし、制作者・工房名がわかったものの、その詳細については今後の課題である。また、本稿で制作者・工房名としてとりあげた中には、後代の追銘・追刻もあるかもしれない。

ここに紹介した作品は制作者・工房、年記、重量、護符の文章、その他の言葉が刻まれたものであった。今回得られたデータが、今後、トルクメンのジュエリーを研究していく上で参考となれば幸いである。また、館蔵コレクションにはロシア・ソ連、ペルシア、アフガニスタンの大小の銀貨を下げ飾りなどの部分に使用したものがある。これらも年代や制作された地域を知る上で助けとなるに違いない。

トルクメンの人々にとって、ジュエリーは貴金属で作られた財産的価値を持つとともに、カーネリアンを始めとする素材が持つ護符として機能し、着用者の立場によって変化することで社会的立場を表現するといったさまざまな役割を合わせ持っている。頭飾りや腕飾りなど露出する部分のジュエリーは、豊かさを誇示するものでもあるため、過剰に大きな、実際に着用しない、着用できないジュエリーさえ作られることがある。

現代では、トルクメニスタン都市部を見る限り、祭典など特殊な日以外はジュエリーを全身につける場面はない。それでも、ブローチのような小型の胸飾りなどはまだまだ健在で、今でもジュエリーは制作されている。アシガバードのトルクメン人家庭では、部屋の壁にジュエリーを飾っているのを見ることがある。しかし、旧ソ連側のトルクメニスタンとそうでないアフガニスタンやパキスタン、イランでは状況はかなり異なる。両者を見較べれば、90年近い政治的分断があらゆる側面で文化を変容させたことを実感できる。トルクメンのジュエリー、ひいてはトルクメン文化を理解するためにはトルクメニスタン一国ではなく、同じく旧ソ連のウズベキスタンや旧ソ連外のアフガニスタンなど周辺地域にも目配りしなければならないだろう。平成9年度の研究助成およびそれ以降の有休と自費による調査を通じて得たことのひとつである。

今回取り組んだ銘文は、アラビア語、ペルシア語、トルクメン語で書かれており、右から左へ筆記するアラビア・ペルシア文字だけの問題ではなかった。当館コレクションの一部作品は、展覧会カタログで紹介されているが、スイスやドイツの研究者によって判読不明とされるものも多数あり、その解読は当館収蔵以来の悲願であった。本稿は、館蔵コレクションに含まれる銘文を読み解いた資料紹介であり、制作者や工房についての研究は今後に委ねたい。

最後になるが、本稿の執筆にあたって多くの方々の御指導と御協力をいただいた。当館コレクション

収蔵時関係者および旧蔵者、旧ソ連領中央アジア現地調査へ背中を押してくださった財団法人ポーラ美術振興財団、白石和己先生、初期の現地調査準備のために有益な助言をいただいた加藤九祚先生、加藤定子先生、杉村棟先生、ポーラ文化研究所コレクションについて情報提供いただいた村田孝子氏、そして、現地で直面したあらゆる場面で手助けを惜しまなかった中央アジアの友人たちに感謝している。とりわけ、当該各言語に精通するヒダヤト・シディキ氏の協力がなければ本稿は成立しなかった。ここに記して、心より感謝と敬意を表する。

Bilgiler : Türkmen zergerlikleri yeghindermasyny gözlamana bakişanlara allah yalqasýn diyan. Büyük Türkmen zergerlik yeghendermasýny ele geçirmek için baqışan Türkmenlere ve orta Asiyalylara ve Arapça, Farsça ve Türkmen yazylary terjume eden Hedayat Siddiqi”ya Teşekür edip Allah yalqasin diyan.

【註】

- (1) ポーラ文化研究所所蔵のトルクメンのジュエリーについては、次の2冊がある。ヨハネス・カルター [著]『トルクメンの装身具 ポーラ文化研究所コレクション3』ポーラ文化研究所、1992年、157p. 全作品のカラー図版を掲載。最近では、村田孝子・鴨川和子・駒田牧子 [共著]『シルクロードの赤い宝石—トルクメンの装身具』ポーラ文化研究所、平成18(2006)年、100p. でも紹介されている。
- (2) 展覧会カタログ『トルクメン・ジュエリー』広島県立美術館、1999年。これには一部作品のみカラーまたはモノクロ図版を掲載したが、全作品の写真図版を掲載した印刷物は未だ発行できていない。他館への作品貸出に伴い、『シルクロードのフォークロア展』カタログ(2004年)に81点、『偉大なるシルクロードの遺産展』カタログ(2005年)にも7点が掲載されている。また、筆者のその後の現地調査に基づくトルクメニスタンとウズベキスタンの伝統的工芸の現状については、「中央アジアの美術工芸について 旧ソ連領中央アジアを中心に」(『平成12-15年度科学研究費補助金 [基盤研究(B)](1) 研究成果報告書 アジアの藝術思想の解明—比較美学的観点からの研究— 2004年 pp.129-140)、『シルクロードのテキスタイルとジュエリー』(『偉大なるシルクロードの遺産展』カタログ 西日本新聞社ほか 2005年 pp.198-204)を参照。
- (3) トルクメン人(族)はさらに数多くの族(支族)に分かれている。館蔵品に見られるのは、テケ族、ヨムート族、ジャファバイ・ヨムート族、エルサリ族、サルイク族、サルイル族、オラム族などである。中央アジアには、さまざまなルーツを持つ民族が共存している。チュルク系ではトルクメン人の他に、ウズベク人、カザフ人、キルギス人、ペルシア系ではタジク人など。ソ連時代には高麗人やドイツ人も強制移住によって、この地に住むことになった。
- (4) ジュエリーのトルクメン語名称は、その機能や形状によっている。そのため、同じ護符入れでも作品によって名称が異なる。さらに、地域や人によって呼称が違うことも多い。
- (5) この独特の形の背飾りを、トルクメン語でアシクと呼ぶ。日本語のカタログなどで「アジユク」と書かれているのを見かけることがあるが、これはラテン文字表記のasykをフランス語の発音法則で読むとアジユクと濁って、原語の音とは異なるカタカナ表記が生じ、それが繰り返して参照されたことと筆者は推測する。
- (6) サチュは髪意。
- (7) ヨハネス・カルター、1992、p.50。
- (8) Hermann Rudolph, *Der Turkemenenschmuck: Sammlung Kurt Gull*, Museum Rietberg Zürich, Museum für Völkerkunde, Berlin, 1985 は、チューリヒとベルリンで開催された展覧会のカタログで、当館コレクションの一部が含まれており、作

品に関する諸情報とともに銘文についても触れられている。カルター氏の意見もこれにはほぼ同じのようである。本稿とは一部異なる部分があるので、同カタログ番号とRudolphによる解釈を記して参考としたい〔原語のラテン文字表記《ドイツ語訳》〕。No.E16 [*amal-i Ustā Hoğa Nazīr sana 1221* «Werk des Meisters Chodscha Nazir, Jahr 1806 A.D.»].

- (9) Hermann Rudolph 1985, no.E18, [*amal-i Ustā Fanā Şūfī sana 1312* «Werk des Meisters Fana Sufi, Jahr 1894 A.D.»].
- (10) Hermann Rudolph 1985, no.J13d, [1315 A.H./1897 A.D.].文字は判読できないとの記述。
- (11) Hermann Rudolph 1985, no.E32. [*lā ilāha illā llāh Muḥammad ar-rasūl* (sic) *Allāh* «Es gibt keinen Gott ausser Allah, und Mohammad ist der Gesandte Gottes»] [*amal-i Mullā.....Verdi* «Werk des Mullah.....Verdi»] [*sana 1321* «Jahr 1903 A.D.»].
- (12) Hermann Rudolph 1985, no.E33. [*amal-i Mullā.....Verdi* «Werk des MullahVerdi»] [*sana1330* «Jahr 1912 A.D.»].
- (13) Hermann Rudolph 1985, no.E34. [*amal-i Mullā.....Verdi* «Werk des Mullah.....Verdi»].
- (14) Hermann Rudolph 1985, no.E30. [*amal-i Qurbān Menglī sana 1327* «Werk von Kurban Mengli, Jahr 1907 A.D.»].
- (15) ポーラ文化研究所蔵のPlates 69, 70 (ヨハネス・カルター 1992の図版番号), Dieter und Reinhold Schletzer, *Alter Silberschmuck der Turkmenen. Ein Beitrag zur Erforschung der Symbole in der Kultur der Nomaden Innerasiens*, Dietrich Reimer Verlag, Berlin 1983 (英語版 *Old Silver Jewellery of the Turkoman* 1983) のPlates 209, 211, 212, 213, 214も同様である。その幾つかにもクルバン・メングリ銘が見られる。ヨハネス・カルター氏によると、上部のスペード型(木の形)はクルバン・メングリの特徴的な文様という。
- (16) Hermann Rudolph 1985, no.E31. [*amal-i Qurbān Menhlī sana 1334* «Werk von Kurban Mengli, Jahr 1916 A.D.»].
- (17) Hermann Rudolph 1985, no.E24. [*amal-i Qurbān Menglī* «Werk von Kurban Mengli»].
- (18) Schletzer1983掲載のNo.180は、大きさ、文様の配置、銀板貼付の技法、銘文の配置ともに本作と酷似している。ただし、カーネリアンは、本作はテーブル・カットだが、No.180はカボッション・カット。菱形の鍍金銀板貼り付け技法による類似作品は、この作品の他に当館蔵HC-192、HC-572、HC-573がある。これら3点に銘文はないものの、同工房あるいは同地域での制作の可能性が考えられる。また、ポーラ文化研究所蔵のPlates 71,72 (ヨハネス・カルター 1992に掲載)も類似作である。
- (19) Schletzer 1983. Plates 180, 209, 211, 212, 213.
- (20) Hermann Rudolph 1985, no.D63. [*amal-i Muḥammad Nūr Ustā, Ustā Hātīm, sana 1325* «Werk von Meister Mohammed Nur, Meister Chayim, Jahr 1906 A.D.»].
- (21) Hermann Rudolph 1985, no.D83. [1327=1909 A.D., 133-, 1343=1924-25 A.D.]数字のみ記し、他は判読できないとの記述。
- (22) Hermann Rudolph 1985, no.D27 [«Werk des...(?). Jahr 1343 A.H./1924 A.D., Zehn, Sechs»].
- (23) Hermann Rudolph 1985, no.D107. [*amal-i Ustā Maulām Berdī* «Werk von Meister Maulam Berdi»] [1335 A.H./1917 A.D.]. なお、カルター氏も年記があると記述しているが、筆者には確認することができなかった。作者銘のある部分に数字は書かれていない。
- (24) Hermann Rudolph 1985, no.E29. [*amal-i Qurbān Menglī* «Werk von Kurban Mengli»] (同書ママ).クルバン・メングリとしたのは誤りだろう。
- (25) Hermann Rudolph 1985, no.D64. [*Qurbān Geldi Fāšī*].
- (26) Hermann Rudolph 1985, no.D39. 判読できないとしている。
- (27) Schletzer, 1983. Plate 18.
- (28) Schletzer 1983. Plate 228.
- (29) Schletzer 1983. Plate 262.
- (30) ヨハネス・カルター、1992年、No.80。
- (31) Hermann Rudolph 1985, no.D131. [1328 A.H./1910 A.D.].
- (32) Hermann Rudolph 1985, no.E44. [«1332 A.H./1914 A.D.»]. Schletzer 1983のPlate.205に類似した翼のような文様のアシクがあることを指摘している。
- (33) Kalter氏は、«Weight of gold 2 shekel and a quarter. Weight of silver 135 shekel. Work of Bailam Muhammad. 1324(A.D.

1923/24」と読んでいる。

- (34) Hermann Rudolph 1985, no.D29. [*1942 ATA*].
- (35) イスラム社会は古代オリエントの度量衡制度をほぼそのままの形で踏襲した。重量の基礎はディルハムとミスカールであり、ディルハムは大麦50-60粒を基準にして定められ、1ディルハムは3.125gとされた。ディルハムとミスカールの比は7:10であるので、1ミスカールは4.464gとなる。貴金属など軽少なものには1/20ミスカール=0.223gに相当するキーンラートが用いられ、重いものにはまた別の単位が使われた。ただし、時代や地域によって異なることが多い。(『平凡社大百科事典』による)
- (36) 紅玉髓が使用された例として、古代メソポタミアの新アッシリア時代の円筒印章 (BC9-8世紀)、新バビロニア時代の円筒印章 (BC8-7世紀)、有名な「オクサスの遺宝」に含まれるアケメネス王朝時代の円筒印章 (BC5世紀) が見られ、また、3-4世紀イラン(?)出土の人物胸像と印章の持ち主と役職を示した文字のある印章や、アフガニスタンのシバルガン出土のアテナ女神を表した印章指輪 (BC1世紀後半-1世紀前半) などがある。
- (37) Hermann Rudolph 1985, no.A8. [Allāh, Muḥammad, ʿAlī, Fāṭima, Ḥasan, Ḥusayn, sana-yi 1271 (=1854/55 A.D.)].
- (38) Hermann Rudolph 1985, no.E63.判読できないとの記述。
- (39) Hermann Rudolph 1985, no.A16. [*Qul Muḥammad*].
- (40) Hermann Rudolph 1985, no.D57. [*Qul Muḥammad*].
- (41) Hermann Rudolph 1985, no.F25. [*Qul Muḥammad*].
- (42) Hermann Rudolph 1985, no.C29. [*Allāh ḥasbī* «Allah ist mein Alles»].
- (43) Hermann Rudolph 1985, no.E96.
- (44) Hermann Rudolph 1985, no.D15. [*Ġamālī*].

(ふくだひろこ／当館主任学芸員)

広島県立美術館 研究紀要 第10号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.10

発行： 2007年 3月31日
編集・発行：広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum
〒730-0014 広島市中区上鞆町2-22
2-22 Kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN
Tel.082-221-6246 Fax.082-223-1444

印刷： 株式会社中本本店
〒730-0004 広島市中区東白島町13-15
Tel.082-221-9181

©Hiroshima Prefectural Art Museum, 2007
Printed in Japan